

日本通運株式会社
代表取締役 川合正矩 様

謹呈

突然のお手紙で大変失礼致します。

私は、御社の日通旅行大阪支店に平成18年11月まで勤務しておりました大橋均の妻です。

去る6月20日、社長様宛てに“お願い”の文書をさし上げました。しかし、私にとっては非常に残念で悔しいことですが、社長様が私との面談を断るというものでした。それも社長様よりでなく、代理人弁護士様からのものでした。

ご存知かどうかわかりませんが、私の夫は、昨年11月5日に自ら命を絶しました。月日が経つのは早いもので、それから7ヶ月が過ぎています。

夫は、貴社に19歳で入社以来、37年7ヶ月にわたって誠実に会社のために勤めてまいりました。時には、家族のことも犠牲にしながら身を削って尽くしてまいりました。

社長様は、私の夫のこと、夫が自ら命を絶ったことをご存知でいらっしゃいますでしょうか。また、私や子供たちが、夫に対し御社のとってきた過去の態度や、夫が命を絶った直接のキッカケとなったささいなミスへの上司の厳しい叱責の事実には憤りをいただいている事をご存知でしょうか。

もし、ご存知でなかったなら、速やかに詳しい調査をされ、御社として再発防止に取り組んでいただきたいと思っていますところです。

少し経過を述べさせていただきます。

夫は、C型肝炎を患いながらも、多忙な業務に責任を感じ通院治療を続けながら仕事に責任を持って努めてまいりました。遠方への単身での転勤・出向で思い切った長期治療も踏み切れませんでした。

勤続35年目の平成16年、C型肝炎の治療を受けている医師から、治療の最後の機会ですといわれました、私もぜひ入院治療をして欲しいと夫に頼みました。その事を夫が上司にお願いしたところ、「なんでこの時期に休むのか」と問い詰められました。退院後の自宅静養時に、夫は会社に迷惑をかけたので早期復帰に向けて会社に向きました。その折、職場復帰後「半年の通院治療をするなら、身を引いたらどうや」と厳しい言葉で退職勧奨を受けたと、私は夫から聞かされました。こうした時期、夫は精神的にも追いつめられたようでうつ病と医師から診断されました。

御社として、病気をもちながらの社員である私の夫への様々な配慮、法的には「安全配慮義務」というそうですが、その事を果たされたのでしょうか。私と家族は、御社が「安全配慮義務」を怠っていたのだと考えています。

また、私の夫が命を絶った日、私は一人で呆然と放心状態でした。それでも、警察の方から「ご主人のことは会社も関係があるから、電話をしておいたほうがいい。」と言われましたので、私は電話をしました。この日、会社の島田課長さんらが自宅に来られました。その場で、お悔やみを言うこともなく、ミスの「基本的な責任はご主

人にある」との発言をされました。夫が命を絶ったことで、退職となりほっとした様子で、その責任は主人自身にあると強調したかったのかと、後から振り返って思いました。同行の中角さんは、退職の話までされました。翌日には、島田課長さんから電話があり、退職手続きの書類を持参したいと、私にしつこく求められました。

夫の葬儀の段取りも決まっておらず、アメリカにいる2人の息子の帰国日も決まっていない中で、私が動転していたにもかかわらず、何の配慮もありませんでした。

その上司の方は、仕事上の退職手続きの事務処理かもしれませんが、私にとっては夫の死に呆然とし、夫を支えられなかった自責にもさいなまれていた時だったのです。こういった私や家族への配慮をしない夫の上司らの態度に、御社の社員を人としてみない体質を垣間見ました。

社長様はどうお考えでしょうか。

さる5月29日から6月4日まで展示会「私の中で今、生きているあなた」が大阪で開催されました。過労や職場の心労からうつ病になり自ら命を絶った50人の遺書や家族の写真を集めた展示会でした。私の夫、大橋均の仕事上でのトラブルや、業務現場でのプレッシャーなどが書かれた日記、本人の写真も展示されました。この写真展は、大きく世間に取り上げられ大きな反響を呼びました。

今回、東京においても6月30日から7月4日まで同様の展示会が行われています。

社長様にもぜひご覧いただきたいのです。

社長様の判断・決断で、私たち家族や、日本通運株式会社とその関連会社に働く従業員に転機が訪れることを願っております。

お返事をお待ちしています。

平成19年6月29日

大橋錦美